

第 13 回 J T B 交流文化賞一般部門最優秀賞「ひみつの夏休み」

広報5月号からの続き…

この北の大地では、夏のさなかに菜の花が咲き乱れるのだ。

今井さんも「びっくりですよ！私も去年の十月から剣淵に来たので、初めての夏なんです！」と嬉しそうに言った。

家々はどれも一様に、雪が積もりにくいよう傾斜の急なへの字型の屋根をしていて薪ストーブの煙突があり、倉庫は屋根が丸い。

真夏の太陽の下では想像もつかないけれど、この町の冬は、やはり厳しいのだ。

バス停で撮影を終え、鈴木さんが「あそこはとっておきだから」と最後に残しておいてくれた、『パッチワークの丘』が一番きれいに見えるという場所へと向かった。

町民しか知らないという、すれ違いのできない細い道を進んでいく。

いよいよ丘を登りきる手前までくると、ジェットコースターの頂点のように、目の前には空しか見えなくなった。

この先には何が待っているんだろう、小さなときめきにも似た期待が込み上げてくる。



丘を登りきった場所からは、町中が見渡せ、麦やジャガイモの畑がすぐ足元から連なっていた。

農作物の畑が自然に織りなす、緑や明るい黄緑、白、土色がつなぎあわされた風景。

自分が小人になって大きなカーペットを眺めたら、ちょうどこんなふうに見えるのだろうか。

しばらく景色を楽しみ、その場所からまたなだらかに下っていく。

小さな丘をいくつも越えて走るこの道の先には、希望以外にない、と感じさせてくれるような、どこまでも明るく晴れやかに続く道だった。

広大な風景の中で、ついこの間まで危なっかしかったはずの娘の足取りは力強く、しっかりと大地を踏みしめていた。

「一歳五ヶ月って、もうこんなにしっかり走れるものなんですね！」と、今井さんに言われて「そうなんです」と反射的に答えたものの、母親の私が内心驚いていた。

追いかけるこちらが疲れ果てるほど、娘はいたるところで走り回り、カメラのフレームからすぐに外れていってしまう。きゃとぎゃが混じったような、表現しようのない高く大きな声で興奮して笑い、行き止まりなく広がるこの世界を、全身で楽しんでいた。

どの瞬間を切り取っても、きっと娘は今、生まれてから一番開放的に笑っている、最高の写真になるだろうな、と思った。

子どもたちの世界は、ふんわりとやわらかなようであり、シビアで弱肉強食だ。

図書館『絵本の館』で地域おこし協力隊の二人と別れてから、館内の『ごっこはうす』でご満悦で遊んでいた娘は、明らかに自分より体の大きな小学生たちがそこを使おうとすると、さっと場所を明け渡した。

彼らは、ここはいつも私たちの場所だからと当然という様子で、娘のことなど気にもとめずに遊びはじめる。

「トントン、中で私も宿題やってもいいですか？」

「いいよ、どうぞー」

そんなやり取りが聞こえたかと思うと、

「こんなことすると親が心配するでしょ、だめよ」



と自宅での大人の言葉を真似ているらしい、子どもらしからぬセリフも聞こえて、思わず顔がほころんでしまう。

しばらくすると今度は犬役になった男の子が「ワオーン！」と吠え、床に手足をついて書棚の間を駆け回っている。人間って四足歩行で、こんなに速く動けるんだ！本当に動物みたい、と思いながら見ていると、いつの間にか子どもたちの集団は『ごっこはうす』から離れて遊んでいる。

娘は、やっと自分の番だ、と言わんばかりの嬉しそうな顔をして、中へ入ろうとした。

そこへ突然、男の子が至近距離に迫り、娘に向かって「ガオ！！」と大声で吠えたのだ。

娘はびっくりして泣きそうになった、その瞬間だった。

「この人ほんとの犬じゃないよ！人間だから大丈夫だから、ね？」

女の子が娘を安心させようと、声をかけてくれた。